春

大治二年頃、帝が鳥羽殿に行幸なさった際に、範清（のりきよ）は障子歌十首を詠み、感嘆した帝からは「朝日」という剣を、待賢門院からは御衣をいただくという栄誉にあずかった。一族の者たちも喜ぶ中、範清は、かえって出家への思いを深めていく。

北面の武士としての務めを果たしながらも、このままでは悪道に落ちると思った範清は、帝に出家のための暇乞いをするが、帝は驚愕し、許そうとしない。

同じ北面の武士で、範清より二歳年長の憲康（のりやす）が、二十七歳という若さで急逝した。範清はこの世の無常を感じて、物思いにふける。

年末、範清は、この上なく可愛がっていた四歳の娘が自分の袖にすがりついてきたのを見て、これこそが煩悩を断ち切る端緒だと思い、娘を縁から蹴り落した。その日は、十五夜であった。範清は、一晩かけて、涙を流しながら気持ちを整理し、明け方、妻と娘にさまざまなことを約束して、出奔した。嵯峨の奥の聖のもとへと向かい、ついに出家の本懐を遂げたのであった。